AOYAMA NORIO

青山 憲雄

あおやま　のりお

1948年２月22日生まれ。豊頃町出身。現在は妻の愛子さん（旧姓：森江）のふるさとである白糠町で２人暮らし。趣味はゴルフと魚釣り。

「警察官になったことで、真っ当な人生を歩めた」

元警察官の青山憲雄さんが危険性が高い業務に長年にわたって携わり、社会に貢献した人に贈られる第34回危険業務従事者叙勲で瑞宝双光章を受章した。

青山さんは高校卒業後の1966年、警察官として拝命を受け、警察学校に１年入校。翌年の４月に帯広警察署に配属された。その後は釧路方面本部、旭川警察署、道警本部、千歳警察署など、全道各地で勤務し、2007年には釧路警察署へ転勤を命じられ、2008年３月に定年退職した。42年間、危険を顧みず冷静な判断力と行動力で現場をリードし、住民の安心安全に寄与した。

青山さんは、一番危険を感じた時のことを振り返る。

「1969年から３年間、釧路方面本部で方面警ら隊という、いわゆる各方面の機動隊をやっていました。当時は学生運動が盛んでして『安保闘争』や『北海道大学の封鎖解除』、『10.21』という大きなテロ警備などもあり、そういうところに出動して、火炎瓶だとか投石の下をくぐっていました。北海道大学の近くで、デモ警備をやった時に、火炎瓶を投げられて同僚が火だるまになり、それをみんなで消して助けた、ということがありました。その時はさすがに身の危険を感じましたね」

そのような危険な思いをしても警察官を辞めたいと思ったことは一度もないという。

「血気盛んだったんでしょうね。自分が学生の頃は、何もかもが中途半端だった気がしますが、警察官になってからは、自分がやらなければならないことが、次から次へと目の前に現れてきて、一つ一つこなしていくことに一生懸命でした。警察官になったことで、人として真っ当な人生を歩めたと思っています」

生活安全課での仕事が長かったという青山さん。生活安全課では麻薬や覚醒剤、拳銃、風俗といった取り締まりをしていた。

「夜中も寝ないで捜査をして、大変といえば大変だったのですが、結果が出る仕事でしたので、充実感がありました。刑務所を出所した方が『麻薬には二度と手を出しません』と私のところへ誓いに来てくれて、それは今でも記憶に残っています」

青山さんは現在、コールセンターを運営する会社で仕事をしている。

「今の職場は若い人が多く、社長からは『背中を見せてやってくれ』と言われています(笑)。足腰が元気なうちは、仕事を続けたいと思っていますが、ゆっくりと魚釣りでもして、余生を過ごすのも良いかなと、だんだんゴルフもできなくなってくるだろうし」と言って笑う。

それでも“まだまだ若い人には負けないぞ”と、血気盛んな青山さんの背中がそう語っている気がした。

７月13日、青山さんが役場を訪れ、瑞宝双光章の受章を棚野町長に報告しました。